

微笑庵便り 2019年7月号

嵌入れをするという事は、内ぐりをするという事なので、材料は初めから寄木で行いました。顔の前面一材、(この部分は外すと丁度お面のような感じになります)、後面中心剥ぎ二材の三材、彫り上げたら外すので、のちに外せるように、ボンドを接着面に広げず、チョンチョンと置いていく感じで付けます。その段階で角材の総重量は約 14 キロ。だんだん彫っていくにつれ軽くなっていきましたが、赤ちゃん位の大きさですので、本当に赤ちゃんを抱っこするような感じで抱えて教室に持って行っていました。

普通のサイズの仏頭なら訳が分からずとも時間をかけて試行錯誤を繰り返していけば、いろいろな不備が出てしまったとしても、それなりの量と形になっていきます。でも、それが等身大となると話は別で、ともかく量が大きすぎてどうしていいか分からない。彫刻とは木の中に彫りだす形が見えているからこそ、いらないところを取り除けるという性質のもの、まだ、全く見えていない人間にその量は大きすぎました。

とんでもない試行錯誤の繰り返し、彫っては直し彫っては直して、約9か月後に彫り上げた時は息も絶え絶えの感じ、外して内ぐりはしましたが、その時点ではすでに精も魂も尽き果てていて、嵌入れする余力など残っていませんでした。

ひとまず彫りは終了しましたが、まだ彩色が残っています。“塗る”という作業は“時間”そのものが仕事をする＝乾燥する時間が必要なので、例えば、教室の3時間などと区切られた中ではできません。いつ、どこで、どうやってするかは大問題なのですが、その年は教室で希望者参加の夏の合宿が予定されていました。服部先生の三重のお宅近くのお寺をお借りしての2泊3日の合宿、その年のテーマは一刀三礼による開眼(かいげん)でした。一刀三礼(いっとうさんらい)とは1回刀を入れるたびに3回五体投地を行いながら目を切っていく開眼の作法です。そのため、参加者は全員それができる状態の仏頭持参が条件でしたが、私の場合、5尺の仏頭の開眼はその時間では間に合いませんので、目も彫り上げたものを持って参加、合宿で彩色することになりました。

